

# 段玉裁「古十七部諧声表」と江沅『説文积例・积音例』

白 田 真佐子

## 要 旨

本文对段玉裁《古十七部谐声表》与江沅《说文释例·释音例》进行比较研究了。如果我们需要讨论有关谐声符的问题，还要参看江沅《说文解字音均表》一书。江沅将《释音例》的谐声符基本上按照〈古十七部谐声表〉的谐声符排列顺序排列了，但是完全不一致。《释音例》共十七部，个别部的最后部分包括一些谐声符，这些谐声符大部分不在《古十七部谐声表》里。有的《古十七部谐声表》中的谐声符不在《释音例》里。江沅将《释音例》的谐声符按照声首改行了，而某一个谐声符在几个部里，这个事实证明段玉裁〈古谐声说〉也有例外。

关键词：清代；段玉裁；《古十七部谐声表》；江沅；《说文释例·释音例》；谐声表；初声；声首

## 1. はじめに

江沅（字は子蘭・伯蘭，江蘇呉県の人，1767-1838）『説文解字音均表』は段玉裁（字は若庸，江蘇金壇の人，1735-1815）の委託を受けて編纂されたが，江氏はまず『説文积例』を著わした。『説文积例』は「积字例」と「积音例」からなり，段氏の「古十七部諧声表」（『六書音均表』卷二）と直接関わるのは「积音例」である。本稿では，まず段玉裁「古十七部諧声表」の体裁について先行文献をもとに説明し，次に「积音例」の体裁を段氏の表と比較し，必要があれば江沅『説文解字音均表』も参照したい。以上の内容を通して，『説文积例・积音例』が「古十七部諧声表」をそのまま継承しているのか否か，相違点は何かを明らかにすることが本稿の目的である。

以下、本稿の凡例についてである。『説文釈例・釈音例』を「釈音例」と略すことがある。「古十七部諧声表」は各部ごとに順番に諧声符に番号を付け、「釈音例」についても各部ごとに順番に、改行を目安にして番号を付ける。諧声符の前に必要に応じてこの番号を付けることもある。この番号は白田1996・1997と共通である。諧声符について「古十七部諧声表」・「釈音例」では某声と言い、『説文解字音均表』では某音と言うが、本稿では統一しない。『説文解字音均表』の諧声符の番号は説文会1994によるが、5桁の番号なので諧声符の後に付ける。なお、段玉裁『説文解字注』からの引用は例えば「一上1a」のように示し、aは表、bは裏のことである。

## 2. 段玉裁「古十七部諧声表」の体裁に関する先行文献

段玉裁「古十七部諧声表」に関する先行研究は少なくない。頼1983(111-114頁)が日本語で解説しているものとしては要点を突いている。この「古十七部諧声表」が未完成であることについて、倉石氏『段懋堂の音学』(倉石1939)で徹底的に修正してあることを述べる(頼1983, 114頁)。また、許世瑛1942についても言及し、許氏が「古十七部諧声表」を簡潔に補正していることも指摘する(頼1983, 114頁)。諧声表の順について、第四巻の「詩経韻分十七部表」に出て来る順だと言う。

頼1983も紹介している倉石1939に段玉裁「古十七部諧声表」に関する部分がある。倉石博士旧蔵書は東京大学東洋文化研究所にあり、江沅『説文解字音均表』(統経解本)には夥しい書入れがある。通覧してみると、倉石氏は段玉裁「古十七部諧声表」と江沅『説文解字音均表』を対照して、『説文解字音均表』に書入れをしていることがわかった。『六書音均表』のテキストは石印本で、これに書入れが見られる。『説文解字音均表』清稿本は目撃されていないことが、倉石氏旧蔵の『説文解字音均表』(統経解本)を通覧して確認できた。影印本の刊行年からしても倉石氏が清稿本を閲覧するのは無理であるが、清稿本を閲覧しない状況で『説文解字音均表』(統経解本)を補正しており、その功績が博士論文(倉石1939)に成果として発表されているのである。なお、経韻楼本『説文解字注』に附刻されている『六書音均表』には書入れがなかった。また、江沅『説文釈例・釈音例』(『小学類編』所収本)も倉石文庫(東京大学東洋文化研究所蔵)にあるが、これには全く書入れがなかった。

以下、倉石氏の「古十七部諧声表」に関する研究を倉石1939から引用するが、原文中の旧字について、内容に関らない時は常用漢字に直して引用する。諧声符の配列については、「今其の第一部を察するに、先づ絲声を挙げしは、絲字の緑衣に於て韻に入るに因りて凡そ絲声の字は尽く此の部に在ることを定めしものにして、台声を以て之に次げるは緑衣の治字

の台声なるに因る。」(倉石1939, 154-155頁)。と述べる。数例挙げた後、「凡そ此の如きの類みな本表に於て瞭然たり、今贅せず、但、其事尚ほ草創に出で未だ美備に臻らざるものなきに非ず、茲に専ら説文解字注に攷へて其の補ふべきを補ひ其の正すべきを正さん。」(倉石1939, 155頁)と述べる。それから第1部から第17部までの諧声符の訂正や補充を行っている。第1部の最初には「第一部に於ては説文解字の意は怠声に従ひ、落は治声に従ふ、然らば台声泉声の下に當に怠声治声を補ふべし。」(倉石1939, 155頁)とある。

倉石氏は補うべき諧声符の他に、削除すべき諧声符についても指摘していて、第1部の例として「迓声事声市声齒声緲声舊声は三百篇群經説文解字に此を以て声と為すものなし、當に削るべし。」(倉石1939, 157頁)と述べる。迓声は「古十七部諧声表」第1部の19番目で、18番目は丌声である。「迓」の段注(五上22b)には「从辵丌、丌亦声。」(辵丌に从い、丌は亦た声。)とある。ここで、江沅『説文解字音均表』まで見ると、第1部に丌音(0005A)があり、そこに「丌」「迓」の2字が属する。つまり、諧声符としては丌声のみ立てるとよいのである。ただ、「古十七部諧声表」第1部の迓声には「与十三部近別。」(第13部の近とは別である。)という段玉裁自注が付いている。このように迓声だけ見ても、先に述べたように、倉石氏は段玉裁『説文解字注』と江沅『説文解字音均表』を照合させており、さらに段玉裁「古十七部諧声表」と比較していることが分かる。

倉石氏の業績の他に、台湾の林慶勳氏の研究が詳細である。林慶勳1979(238-243頁)「創立諧声表詩經韻表群經表 一諧声表」には体例として7条見える。そのうち配列に関わるものとしては①から⑤がある。⑥は字体、⑦は各部の体裁であるが、紙幅の関係で①から⑤までの配列に関する部分を引用し、日本語訳を付す。

①表之次序、依茂堂所訂古音十七部先後次序為準。

表の順序は、茂堂の定めた古音十七部の前後次序を基準とする。

②每部下注各部所包含之今韻韻目、所謂陸韻、實即『廣韻』。

部ごとに、[第某部の]下に今韻の韻目を含んでいるのは、いわゆる陸韻で、実は『廣韻』である。

③諧声偏旁之次第、以「詩經韻分十七部表」、「群經韻分十七部表」韻脚出現先後之順序為準。

諧声偏旁の次第は、「詩經韻分十七部表」、「群經韻分十七部表」の韻脚が出現する際の順序を基準とする。

④諧声偏旁中、有最初声母者(如弟一部里・才・出)、亦有非最初声母者(如弟一部狸・戔・事)、後者如以前者為字根原則上緊隨其後、亦有例外者如弟一部寺、時皆从出得声、然寺声時声与出声相距甚遠。

諧声偏旁の中には、最初の声母(初声)であるものもあり(例えば一部の里・才・出)、

最初の声母でないものもあるが（例えば狸・戔<sup>サイ</sup>・事）<sup>1)</sup>、後者は前者の字根の原則によってその後にぴったりと随うが、また例外もあり、例えば第一部の寺・時は皆例外もあり、第一部の寺、時は皆出に从って諧声符としているが、寺声・時声は（「古十七部諧声表」では）出声よりも離れた場所にある<sup>2)</sup>。

⑤諧声偏旁列字、以『詩経』、群経韻字所从得声為原則；亦有僅為『説文』部首者、如弟一部而、丌、亥等字；亦有二者皆非者、如弟一部辺等、則不知其用意安在？

諧声偏旁で字を並べるには、『詩経』、群経の押韻字が从う諧声によるのを原則としている。『説文』の部首だけであるものもあり、例えば第一部の而、丌、亥などの字である。そのどちらでもないものもあり、例えば第一部の辺などは、その意図がどこにあるのかわからない。

上記の③⑤については、白田1987を通して調べたことから、正しいと判断できる。白田1987とは「古十七部諧声表」第15部の諧声符に限定して、「詩経韻分十七部表」の押韻字の配列と比較したものであるが、拙稿は林氏の原著を見ていない状態で書いている<sup>3)</sup>。

### 3. 江沅『説文釈例』に関する先行文献

『説文釈例』に関する論文の一編として趙一粟2022があり、趙氏は「『釈音例』在上古研究上の価値」について述べる（105-106頁）。白田2016の「3. 江沅『説文釈例』の成書と刊行」では『説文釈例』の成書と刊行および「釈音例」末尾にある江沅後記について述べている。「釈字例」については趙錚2004、陶生魁2011、曲烜・呂金剛2018等の論文があり、趙錚2004（430-431頁）は「釈音例」にも言及している。李新魁・麦耘1993（72頁）に「説文釈例・釈音例」として17行の説明があり、要点を突いている。

董国華2014（133-144頁）は「第五章 清代中期漢字諧声与古音学研究（下）」の「第一節 江沅『説文解字音均表』漢字諧声与古音研究」で、『説文解字音均表』のみならず「釈音例」についても述べ、優れた論文である。但し、「釈音例」の諧声符の数え方が、初声を中心とする本稿とは異なる。また、『説文解字音均表』の諧声符の数え方も説文会1994と異なる。説文会1994は初声に17部を通しての番号を付け、初声はA、派生する諧声符には二声ならBという記号を付けている。董国華2014の諧声符の数え方は董氏の考えに基づくもので、それは尊重すべきことであり、本稿では初声を中心に諧声符の数を数える方法を取ることにする。

段玉裁「古十七部諧声表」の諧声符や『説文解字注』に見える諧声符については、杜恒聯2019、張道俊2019という業績がある。また、「古十七部諧声表」と『説文解字音均表』の比較については黄智明1996もある。なお、「釈音例」と『説文解字音均表』との比較について

は白田1996・1997がある。

## 4. 段玉裁「古十七部諧声表」と江沅『説文釈例・釈音例』の比較

### 4.1 体裁の比較

段玉裁「古十七部諧声表」（『説文解字注』経韻楼本付刻）と江沅『説文釈例・釈音例』（『小学類編』所収本）とを体裁から比較する。段玉裁「古十七部諧声表」では各部ごと1行につき諧声符4例で、その後で改行している。初声から発展する諧声符が続いていることもあるが、見た目ではわからない。例えば、第一部冒頭の4例は以下の通りである。

第一部            陸韻，平声之哈，上声止海，去声志代，入声職徳  
    絲声 台声 泉声 里声

この4例の諧声符に対応する「釈音例」であるが、この「釈音例」では初声ごとに改行している。上記の「古十七部諧声表」の4例に対して、「釈音例」の初声は3例対応するが、二声以下もある場合を含めると、諧声符の延べ数は8である。

第一部            陸韻，平声之哈，上声止海，去声志代，入声職徳  
    絲声 茲声  
    台声 治 怠声 治声 狸声  
    里声 狸声

「陸韻」は陸法言の韻を指すが、具体的には『広韻』の韻目である。これは「古十七部諧声表」を踏襲している。初声の次に二声以下を配列している。絲声の二声の茲声は「古十七部諧声表」第1部では40番目にある。台声と里声に狸声が重複しているが、台声の狸声は衍字であろう（本稿では諧声符が複数の部に存在する場合、両見と言うこともある）。それは『説文解字音均表』と比較してみると分かる。なお、台声の「治」には「治 古音多在第五部。此亦合韻之理也。（治 古音は第5部にある。これも合韻の理である。）」という江沅の自注が付いている。なお、『説文解字音均表』では第1部台音（0018B）に「治」の字があるが、それとは別に第5部には治音（0455A）があり、その所属字として「治」の字があり、「治」の字は第1部と第5部に両見している。

### 4.2 諧声符の比較

段玉裁「古十七部諧声表」の諧声符について、各部の最初と最後の諧声を江沅『説文釈例』の諧声符と比較した結果が、以下の対照表である。表中のBは二声であることを示す。

	段玉裁「古十七部諧声表」			江沅『説文釈例・釈音例』			
	諧声符数	最初と最後の諧声符		諧声符数	最初と最後の諧声符		
					基本部分	増補部分	
第1部	118	1 絲声	118 苟声	98	1 絲声	(86 苟声)	98 圣声
第2部	53	1 毛声	53 邑声	69	1 毛声	(39 邑声)	69 誠声
第3部	151	1 九声	151 目声	133	1 九声	(112 目声)	133 茜声
第4部	42	1 婁声	42 斲声	40	1 婁声	(32B 斲声)	40 戌声
第5部	141	1 且声	141 兪声	114	1 且声	(113 兪声)	114 冶声
第6部	30	1 菅声	30 蓋声 <sup>4)</sup>	23	1 菅声	(9 丞声)	23 冑声
第7部	82	1 咸声	82 卍声	56	1 咸声	(50 卍声)	56 聃声
第8部	38	1 函声	38 帀声	41	1 函声	(36 帀声)	41 銜声
第9部	55	1 中声	55 茸声	43	1 中声	(30 茸声)	43 𠵽声
第10部	87	1 王声	87 𠵽声	60	1 王声	(44 𠵽声)	60 宕声
第11部	41	1 熒声	41 省声	36	1 熒声	(31 省声)	36 麤声
第12部	89	1 秦声	89 別声	77	1 秦声	(56 別声)	77 轟声
第13部	69	1 先声	69 囊声 <sup>5)</sup>	67	1 先声	(45 𠵽声)	67 糞声
第14部	138	1 夷声	138 斲声	129	1 夷声	(90 斲声)	129 晚声
第15部	251	1 婁声	251 擊声	208	1 婁声	(166 擊声)	208 闕声
第16部	71	1 支声	71 買声	63	1 支声	(46 買声)	63 緱声
第17部	65	1 它声	65 𠵽声	37	1 它声	(34B 𠵽声)	37 𠵽声
闕音	なし			22	1 爪	----	22 𠵽

上表も参考にしながら、段玉裁「古十七部諧声表」をもとに江沅が編纂した「釈音例」との相違点を見ていきたい。両方の表とも古韻分部は17部で同一であるが、「釈音例」の最後に「闕音」という部分があり、この部分は「古十七部諧声表」にないもので、江沅が新たに設けたのである。「闕音」は「古十七部諧声表」にない部分で、「釈音例」と比較できないので、今回は最初の例のみ紹介しておきたい。「爪」の説解（段注三下14a）には「从反爪，闕。」（爪の反転した字形に従い，闕。）とあり、段玉裁は「謂闕其音也。」（その音が欠如していることを謂う。）と述べる。

「古十七部諧声表」各部の最初の諧声符は「釈音例」のそれと同一である。「釈音例」各部の諧声符は基本的に「古十七部諧声表」の諧声符を継承して、傾向としてはほぼ同じ順に並べている<sup>6)</sup>。但し、例外も少なくない。例えば、「釈音例」第1部において58伏声は「古十七部諧声表」第1部の114伏声に対応し、このあたりまで「釈音例」と「古十七部諧声表」の諧声符が飛び飛びではあるが、配列はほぼ同じである。ところが、「釈音例」59采声は「古十七部諧声表」の52采声に対応し、この後「釈音例」86苟声と「古十七部諧声表」118苟声まで、例外もあるが、配列がほぼ一致していく。ただ諧声符の配列の違いについては、



煩瑣を避けるため、本稿では逐一列挙することは避ける。

表中の「基本部分」と「増補部分」という呼称は本稿で名付けたものである。「古十七部諧声表」と「积音例」で諧声符が基本的に一致する部分を上掲の表では「基本部分」としている。「古十七部諧声表」にない諧声符で「积音例」にある諧声符もあり、それは「基本部分」の後に列挙されている場合が大部分であり、上表では「増補部分」とした。

「基本部分」について「古十七部諧声表」と「积音例」の諧声符がすべて一致するのかというと、結論が先になってしまうが、そういう訳でもない。「古十七部諧声表」にあって「积音例」にない諧声符、逆に「古十七部諧声表」にないが「积音例」にある諧声符というのが存在する。「補足部分」の諧声符についても、「古十七部諧声表」に全くないわけではないという場合もある。このような問題のある諧声符について本稿で論じる。

各部ごとに、以下の a と b の 2 点から論じることにした。

〈a〉「古十七部諧声表」にあって「积音例」にない諧声符

但し、この〈a〉の例のうち、「古十七部諧声表」では諧声符になっているが、「积音例」ではある諧声符の所属字とみなしている場合がある。例えば、以下の第 1 部の項目で例として挙げるが、「古十七部諧声表」の 19 声である。こういった例は逐一指摘しない。というのは、倉石 1939 と許世瑛 1942 で、「古十七部諧声表」では諧声符であるが、そうすべきでない例として徹底的に列挙されていて、それは「积音例」にも適応できるものが多い。したがって、この〈a〉という例がない場合も部によっては起こりうる。なお、「古十七部諧声表」にある諧声符については、「积音例」では初声でなくて二声以下の諧声符に対応することもある。

〈b〉「积音例」にあって、「古十七部諧声表」にない諧声符

結果から先に言うと、「古十七部諧声表」と「积音例」を比較すると、許 1942 が注を付けたり、補足している諧声符と符合する例が少なくない。また、倉石 1939 も指摘している例も少なくない。本稿では許氏・倉石氏の業績を尊重したうえで、「积音例」を表舞台に出し、必要があれば江沅『説文解字音均表』まで参考にして検討したい。煩瑣を避けるため、「积音例」の諧声符は初声を主とする。

## 第 1 部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」19 声は「积音例」第 1 部にはなく、「古十七部諧声表」18 声は「积音例」第 1 部にもある。声は倉石氏の解釈をすでに引用したが、諧声符として立てる必要はないものであり、江沅もそれに気づいて、「积音例」第 1 部に 6 声のみを載せている。このような例は第 1 部に限らず、17 部全体に散見するが、問題のある場合以外は列挙しないことにする。「积音例」声の二声は其声であり、『説文解字音均表』では丌音 (0005A) と其音 (0006A) は別々の初声としてい

る。(2)「古十七部諧声表」40茲声、41玆声に相当する諧声符について、「积音例」第1部では茲声は1絲声の二声であり、玆声は18番目に来ている。この二つの諧声符に問題があることは白田2019「4.2統経解本の校勘・案語と雷浚」で指摘した。(3)「古十七部諧声表」68吏声は「积音例」第1部に相当する諧声符がない。「古十七部諧声表」・「积音例」とも第1部に史声があり(諧声符の番号はそれぞれ67, 68)で、史声は吏声の初声に当たる。『説文解字音均表』第1部に史音(0063A)があり、吏音(0063B)は二声であり、この段階で史声という諧声符と派生した諧声符がまとまったのである。(4)「古十七部諧声表」109服声は「积音例」第1部にないが、𠂔声は「古十七部諧声表」・「积音例」ともに第1部にある(諧声符の番号はそれぞれ108, 55)。『説文解字音均表』第1部には初声として𠂔音(0050A)があり、二声として服音(0050B)がある。

〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」1絲声から118苟まで、「积音例」1絲声から86苟声に対応する。「积音例」87𠂔声以降は「古十七部諧声表」第1部にはない諧声符であるが、それは96𠂔声まで続き、97佩声と98圣声は「古十七部諧声表」第1部にある(諧声符の番号はそれぞれ29, 88)。ここで注意を要するのは、『説文解字音均表』第1部まで見ると、𠂔音(0081A)には「𠂔」のみが属し、第3部に束音(0249A)があり、ここに「𠂔」字が両見していることである。段氏の「古十七部諧声表」では第3部に113束声があり、「𠂔」の段注(八下24a)によれば束声で、古音第3部に属す。(2)「积音例」62𠂔声は「古十七部諧声表」第1部にはないが、『説文解字音均表』第1部まで見ると、𠂔音(0057A)は初声で、二声が𠂔音(0057B)となっている。「古十七部諧声表」第1部に70𠂔声、「积音例」第1部に70𠂔声があり、江沅は「积音例」で初声に相当する諧声符𠂔声を増補したのに違いない。(3)「积音例」64𠂔声は「古十七部諧声表」第1部にはない。

## 第2部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」11暴声は「积音例」第2部にはないが、『説文解字音均表』第2部にはある。「古十七部諧声表」12暴声は「积音例」第2部9番目で、『説文解字音均表』第2部では暴音(0101A)と暴音(0102A)は別々の初声となっている。字形が似ており、「积音例」の段階で江沅は何か考えていたのかもしれない。(2)「古十七部諧声表」37𠂔声は「积音例」第2部にはない。𠂔声は「古十七部諧声表」・「积音例」とも第2部にある(諧声符の番号はそれぞれ36, 28)。『説文解字音均表』第2部に初声として𠂔音(0121A)があり、二声に𠂔音(0121B)がある。(3)「古十七部諧声表」40堯声に対して、「积音例」は31𠂔声があり、『説文解字音均表』第2部では堯音(0125A)・𠂔音(0124A)が別々の初声となっている。

〈b〉の例として、「积音例」40𠂔声、41𠂔声、45𠂔声から69𠂔声までの諧声符は「古十七部諧声表」第1部にはない。但し、47𠂔声は「古十七部諧声表」では第3部の54番目にある。



### 第3部

〈a〉の例として以下の例がある。「古十七部諧声表」25 麤声・30 髟声・54 爪声・75 頁声・76 道声・137 珣声・146 夙声・150 秃声は、「釈音例」第3部に対応する諧声符がない。(1) 髟声・爪声・道声・珣声・夙声・秃声に対応する髟音(0275A)・爪音(0202A)・道音(0217A)・珣音(0262A)・夙音(0258A)・秃音(0205A)は『説文解字音均表』では第3部にある。(2) 麤声について、秋声であれば「古十七部諧声表」・「釈音例」とも第3部にある(諧声符の番号はそれぞれ26, 15)が、「釈音例」では秋声の二声に愁声がある。『説文解字音均表』では第3部に初声として麤音(0247A)があり、二声・三声として秋音(0247B)・愁音(0247C)があり、ここで麤音から派生した諧声符がまとまっている。(3) 爪声は「釈音例」では第2部47番目にある。(4) 段玉裁は「古十七部諧声表」第3部で73首声・74百声・75頁声・76道声を順番に置き、「頁声」の自注で「亦古文百。」(また古文の百。)と言う。「釈音例」第3部に51首声と52百声はあるが、頁声は「釈音例」では第15部190番で、江沅は頁声の所属を第3部としていない。なお、『説文解字音均表』では「頁」字(1003C 旨音の所属字)が第15部にある。『説文解字音均表』第3部では道音(0217A)・首音(0218A)は別々の初声となっている。

〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「釈音例」24 勺声とその二声である包声について、「古十七部諧声表」第3部では勺声がなく、39 包声・40 旬声はある。『説文解字音均表』第3部では勺音(0189A)が初声となって包音(0189B)・旬音(0189C)がそれぞれ二声・三声となっている。「古十七部諧声表」には初声に当たる包声がなく、「釈音例」を経て『説文解字音均表』で初声・二声・三声が揃ったことになる。(2)「釈音例」2 戛声・31 幼声、113 迥声から133 菑声までの諧声符は、「古十七部諧声表」第3部にない。

### 第4部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。「古十七部諧声表」では8 區声・9 菑声と並んでいるが、「釈音例」では6 區声のみである。江沅は『説文解字音均表』では第4部に區音(0304A)を初声として立て、「菑」をその所属字としている。このような例については本稿4.2の第1部の箇所でも指摘したように、逐一紹介しない。

〈b〉の例として、「釈音例」33 鬥声から40 戍声までは「古十七部諧声表」第4部に相当する諧声符がない。

### 第5部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」45 魚声・46 鱣声に対して、「釈音例」は24 魚声とその二声の鮓声が対応し、「釈音例」に鱣声がないが、『説文解字音均表』第5部では魚声(0366A)が初声で、鮓音(0366C)・鱣音(0366D)はその三声・四声となっている。(2)「古十七部諧声表」55 賈声は「釈音例」第5部にない。而声は「古十七

部諧声表」・「积音例」とも第5部にある（諧声符の番号はそれぞれ54, 28）。『説文解字音均表』第5部には初声として両音（0369A）があり、二声が賈音（0369B）というようにまとまっている。(3)「古十七部諧声表」では96鼓声・96<sup>ガイ</sup>鼓声と並んでいるが、「积音例」第5部には鼓声のみがある。「积音例」第4部では5壹声に「鼓」字が見え、「入魚部大謬。」（魚部〈段玉裁古音第5部〉に入れるのは大いなる誤り。）と江沅が記している。『説文解字音均表』まで見ると、第4部の豈音（0303A）の所属字として「鼓」字が見え、第5部に鼓音（0409A）があり、江沅は鼓音を認めていない<sup>7)</sup>。(4)「古十七部諧声表」では132赤声・133赦声・134赫声と並んでいるが、「积音例」第5部では95赤声とその二声の赦声のみで、赫声はない。『説文解字音均表』第5部まで見ると、赤音（0438A）と赫音（0439A）は別々の初声であり、赤音の二声は赦音（0438B）である。(5)「古十七部諧声表」と「积音例」で諧声符は一致するが、問題があるのは「古十七部諧声表」42去声と113△声が離れていることである。「积音例」では22△声（乙声は誤刻）が初声で、その二声として去声がある。

〈b〉の例として、「积音例」15尻声・32虞声・54號声・80初声・81𠂔声、100歩声から103加声まで、105虐声から112𠂔声までと114治声は、「古十七部諧声表」第5部にない。治声については本稿4.1ですでに述べた。

## 第6部

〈a〉の例として以下の例がある。「古十七部諧声表」3蠅声・10朕声・25楽声・26仍声・27再声・28稱声・29𠂔声に対して、「积音例」第6部に対応する諧声符がない。(1)『説文解字音均表』第6部では蠅音（0457A）・楽音（0472A）・乃音（0473A、「仍」はその所属字）・再音（0475A、「稱」はその所属字）はそれぞれ初声となっている。(2)朕声について、𠂔声は「古十七部諧声表」・「积音例」とも第6部にある（諧声符の番号はそれぞれ9, 5）。「积音例」の𠂔声には二声の騰声も見える。『説文解字音均表』第6部に初声としての𠂔音（0461A）があり、二声・三声がそれぞれ朕音（0461B）・騰音（0461C）で、諧声符がまとまったのである。(3)乃音についても問題がある。『説文解字音均表』では乃音は第1部（0068A）と第6部に両見となっており、「仍」字も乃音に所属し、両部に見える。「古十七部諧声表」・「积音例」とも第1部に乃声がある（諧声符の番号はそれぞれ75, 74）。(4)𠂔声（𠂔は𠂔の誤字）について補足すると、「积音例」では第13部（62番）と第15部（199番）に両見し、『説文解字音均表』でも𠂔音は第13部（0851A）と第15部（1183A）に両見する。これはある諧声符がある一つの部に属するという、段玉裁「古諧声説」（『六書音均表』巻一）は「积音例」において例外が出てきたことを示している<sup>8)</sup>。

〈b〉の例として、「积音例」20等声から23𠂔声までは「古十七部諧声表」第6部にない。20等声・23𠂔声は『説文解字音均表』では等音（0093A）・𠂔音（0092A）として第1部にあり、等音は第1部の最後の諧声符となっている<sup>9)</sup>。

### 第7部<sup>10)</sup>

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」2 鹹声は「釈音例」第7部にない。咸声は「古十七部諧声表」・「釈音例」とも第7部にあり(諧声符の番号はどちらも1),「釈音例」の咸声の二声と三声はそれぞれ箴声・緘声である。『説文解字音均表』第7部では初声として咸音(0480A)があり,箴音(0480B)・鹹音(0480C)・緘音(0480E)はそれぞれ二声・三声・五声となって,ここで諧声符がまとまったことになる。(2)「古十七部諧声表」50 甜声は「釈音例」第7部にない。『説文解字音均表』第8部において,甘音(0555A)・甜音(0556A)がそれぞれ初声となっている。(3)「古十七部諧声表」79 協声の他に73 叶声があるが,「叶」は「協」の重文である。「釈音例」第7部には35 荔声はあるが,協声・叶声はない。『説文解字音均表』第7部には荔音(0519A)・協音(0522A)がそれぞれ初声としてあり,協音の中に「協」字の重文として「叶」が見える。

〈b〉の例として,「釈音例」37 夾声,51 皂声から56 聃声までは「古十七部諧声表」第7部にない。皂声は「古十七部諧声表」第10部の36番目に見え,江沅は『説文解字音均表』において皂音を第7部(0538A)と第10部(0641A)にそれぞれ初声として載せる。

### 第8部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」9 焱声は「釈音例」第8部にない。『説文解字音均表』第8部には焱音(0550A)があり,炎音(0547A)とは別々になっている。(2)「古十七部諧声表」29 曄(左側は日)声は「釈音例」第8部18 日声に「曄,附此。」(「曄」はこれに付ける。)とある。「曄」はもしかしたら「曄」(左側は白)かもしれない。江沅は『説文解字音均表』第8部に曄音(0566A)を初声として立てる。曄音の一つ前は曩音(0565A)で「曩」の字の上側は「日」である。

〈b〉の例として,「釈音例」26 眾声から30 劫声まで,37 芟から41 衡声までは「古十七部諧声表」第8部に対応する諧声符がない。眾声は「古十七部諧声表」第15部の16番目に見え,「釈音例」第15部の12番目に見え,「釈音例」では両見している。それは『説文解字音均表』でも同様で,眾音は第8部(0574A,初声)と第15部(眾音<1062B>は隶音<1062A>の二声)に両見している。眾声が「釈音例」で両見していることは段玉裁「古諧声説」の例外を示しており,その例外は『説文解字音均表』に引き継がれているのである。

### 第9部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」38 共声は「釈音例」第9部に対応する諧声符がない。『説文解字音均表』第9部に共音(0607A)が初声としてあり,他の部に共音は見られない。(2)「古十七部諧声表」43 匈声・44 兕声は「釈音例」第9部にないが,これらの初声に当たる凶声は「古十七部諧声表」第9部の42番,「釈音例」第9部の21番にある。「釈音例」凶声の二声の勾声が匈声の誤刻の可能性もあるが,今回は疑問

点として残すのみとする。)『説文解字音均表』第9部に凶音(0609A)があり、兇音(0609B)・匈音(0609D)はそれぞれ二声・四声である。(3)「古十七部諧声表」48嵩声は「积音例」第9部にない。「嵩」字は『説文』新附字で大徐本(九篇下)に見える。「嵩」の段注(九下6b)に「崧」「嵩」が「崇」の異体字であることが書かれている<sup>11)</sup>。「古十七部諧声表」第9部には47宗声があり、「积音例」第9部にも22宗声があり、新附字の諧声符である嵩声を「积音例」では削除したと考えられる。『説文解字音均表』第9部では宗音(0610A)に、「崇」字が所属字として見える。(4)「古十七部諧声表」54豕声は「积音例」第9部にない。「积音例」第3部に106豕声があり、ここに「豨」字が見える。『説文解字音均表』第3部に豕音(0270A)があり、第9部にはない。「豨」(「豨」に同じ)の段注(九上37b)では第9部と第3部の合音としているが、江沅は「豨」字を第3部の所属とみなしているのに違いない。(5)「古十七部諧声表」55茸声は「积音例」第9部にない。「积音例」第1部に35耳声があり、そこに「茸」字が見え、第9部に入ることが記されている。さらに、『説文解字音均表』まで見ると第9部に初声として茸音(0618A)があり、第1部に初声として耳音(0029A)があり、そこに「茸」字が所属しており、「茸」字は両見している。

〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「积音例」19収声(収は升の本字)は「古十七部諧声表」第9部および第3部にはない。「积音例」第3部にも124収声が見え、「収声当入東部。」(収声は東部〈第9部〉に入れるべきである。)という江沅自注がある。『説文解字音均表』では収声(0269A)は第3部のみにある。(2)「积音例」24弄声・31贛声・33舂声、39闐声から43駟声までも「古十七部諧声表」第9部にはない。このうち贛声は「古十七部諧声表」第8部の19番目にあり、「积音例」第8部11贛声の二声として贛声が見え、贛声は「积音例」で両見している。

## 第10部

〈a〉の例として、「古十七部諧声表」34康声は「积音例」第10部にない。『説文解字音均表』第10部では庚音(0640A)を初声として、三声としての康音(0640C)があるが、「康」字は「穰」の重文に当たる。『説文解字音均表』で諧声符がまとまったことになる。

〈b〉の例として、「积音例」29竟声・30𨾏声・45杏声・46丈声・59夢声・60宕声は「古十七部諧声表」第10部にない。このうち問題があるのは杏声・夢声・宕声である。(1)杏声は『説文解字音均表』第10部まで見ると、杏音(0646H)は向音(0646A, 初声)の八声となっている。向声であれば、「古十七部諧声表」第10部の58番目、「积音例」第10部の20番目にある。(2)夢声について「积音例」第10部には「六部転十。」(第6部から第10部に入る。)という江沅自注があり、第6部に1瞢声があり、その三声が夢声である。『説文解字音均表』まで見ると、瞢音(0456A, 初声)とその三声の夢音(0456C)は第6部で、他の部との両見はない。(3)宕声について『説文解字音均表』第10部まで見ると、宕音はなく、

「宕」字が易音（0631A, 初声）の五声に当たる碭音（0631E）の所属字となっている。

#### 第11部

〈a〉の例として特筆すべきものではなく、〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「积音例」14頤声とその二声の嬰声は、「古十七部諧声表」第11部では22嬰声のみである。『説文解字音均表』第11部は頤音（0693A）を初声と定め、二声を嬰音（0693B）としている。「积音例」の段階で初声が決まった例と言える。(2)「积音例」28蚩声・30奠声・32羸声から36麀声までの諧声符は「古十七部諧声表」第11部にない。このうち問題になるのは蚩声と麀声である。『説文解字音均表』で蚩音は第11部（0706A, 初声）と第15部（1096C, 中音〈1096A〉の三声）に、麀音は第11部（0713A, 初声）と第16部（「麀」字は庫音〈1195C〉の所属字、庫音は卑音〈1195A〉の三声）にそれぞれ両見する。

#### 第12部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」14芻声は「积音例」第12部にない。初声に当たる旬声は「古十七部諧声表」・「积音例」とも第12部にある（諧声符の番号はどちらも13）。「积音例」第12部旬声の二声は筍声である。『説文解字音均表』第12部に旬音（0725A）があり、それから派生した諧声符として筍音（0725B）と芻音（0725C）があり、旬声とそれから派生した諧声符は『説文解字音均表』でまとまったのである。(2)「古十七部諧声表」52矜声の「矜」字は段注（十四上36b）で「矜」に直してある。「积音例」第12部には矜声はないが、15令声があり、そこに「矜，俗誤从今，改正。」（矜は俗に誤って今に从うが、〈矜に〉改正する。）という江沅自注がある。

〈b〉の例として、「积音例」57𦉳声から77轟声まで、「古十七部諧声表」第12部に対応する諧声符がない。

#### 第13部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」26奔声は「积音例」第13部にない。先に『説文解字音均表』を見ると弁音（初声）が第13部（0802A）と第15部（1097A）に両見しており、その所属字として「奔」字も両見している。「古十七部諧声表」第15部には174𠂔声と派生する諧声符が178𠂔声まで続くが、奔声はない。一方、「积音例」第13部に13弁声があり、「此字在十五部而弁声者多入十三部，此合音也。」（「弁」字は第15部にあるが、弁声の字は多く第13部に入り、これは合音である。）という自注があるが、奔声は見られない。「积音例」第15部に113𠂔声があるが、「奔」字については言及がない。(2)「古十七部諧声表」には42豨声・43豳声と字形の類似した諧声符が並んでいる。「积音例」第13部に27豨声はあるが、豳声はない。『説文解字音均表』第13部において豨音（0817A）・分音（0795A）はあるが、「豳」字は分音（初声）の所属字「邠」の重文であり、豳音はない。(3)「古十七部諧声表」51臺声に対して対応する諧声符は、「积音例」第13部にはない。



「𧄸」字は『説文解字』にない字であるが、『詩経』に見える字で、段玉裁「詩経韻分十七部表」（『六書音均表』巻四）第13部に「𧄸驚」（大雅・生民之什）第五章の押韻字として見える。段玉裁『詩経小学』（巻二十三）において、「文王」（大雅・文王之什）という別の詩にも「𧄸𧄸」とあり、その段注にも『説文』に「𧄸」のないことが指摘されている<sup>12)</sup>。また、張道俊2019（163頁）には「“𧄸声”不是声首，段注“𧄸”既“𧄸”之俗字，“𧄸声”是十三部声首。」（“𧄸声”は声首ではなく、段注では“𧄸”は“𧄸”の俗字とし、“𧄸声”は第13部の声首である。）とあり、この説が妥当だと思われる。『説文解字音均表』第13部に𧄸音（0795C，初声は分音）があり、その所属字が「𧄸」である。なお、張氏の言う声首とは、本稿では初声と言っている諧声符に相当する。

〈b〉の例として、「釈音例」46聞声から65夙声までと67糞声で、「古十七部諧声表」第13部に対応するものはない。

#### 第14部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」27衰声・72貫声・93漕声は「釈音例」第14部にない。これらの初声に当たる諧声符の𧄸声・𧄸声・𧄸声は「古十七部諧声表」（諧声符の番号は26, 71, 91）・「釈音例」（諧声符の番号は15, 39, 54）とも第14部にあり、『説文解字音均表』第14部に、初声として𧄸音（0870A）・𧄸音（0893A）・𧄸音（0909A）はある。(2)「古十七部諧声表」の136尋声に対応する諧声符は「釈音例」第14部にない。倉石1939（186頁）に「尋声の字書韻書に見えて未だ説文に見えざるものと併せて当に削るべし、」とある。張道俊2019（183頁）に「“尋声”不是声首，段氏認為援擗古今字，擗揅正俗字，爰声、宣声均在十四部，故此推斷尋声在十四部。」（“尋声”は声首ではなく、段氏は援・擗を古今字とみなし、擗・揅を正俗字とみなし、爰声・宣声とも第14部にあるので、尋声は第14部にあると推断したのである。）とあり、大変詳しい。

〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「釈音例」48兀声に相当する諧声符は「古十七部諧声表」第14部にない。「釈音例」では兀声の二声・三声して元声・完声があり、これに対応する「古十七部諧声表」第14部の諧声符は83元声・84完声である。兀声の所属には問題があり、「釈音例」では第14部の他、第15部の129番目にもある。『説文解字音均表』においても兀音は第14部（0902A）と第15部（1115A）に両見する。(2)「釈音例」91𧄸声から129𧄸声での諧声符で、「古十七部諧声表」第14部に対応するものはない。

以上の〈a〉〈b〉の他に指摘しておきたいのは、「古十七部諧声表」の15旦声と58𧄸声は場所が離れているが、「釈音例」第14部では6旦声のもとに𧄸声が二声として置かれていることである。

#### 第15部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」110采声・114市声・180𧄸<sup>フツ</sup>



声・187奪声・203白(凶)声・213竄声に相当する諧声符は、「积音例」第15部にない。『説文解字音均表』まで見ると、初声として采音(1052A)・市音(1056A)・轆音(1099A)・奪音(1105A)・白(凶)音(1117A)・竄音(1124A)が第15部に置かれている。(2)「古十七部諧声表」45犀声・97擗声・108豕声・133砵声・142契声は「积音例」第15部にない。『説文解字音均表』第15部に犀音(1005B)・奉音(1097B,「擗」字は奉音の所属字)・豕音(1050B)・厲音(1074B,「砵」字は厲音の所属字)・契音(1077D)があるが、初声そのものではない。これらの初声に相当する「积音例」第15部の諧声符は、26尾声・64棄声(その二声は弁声)・72豕声・93董声(二声が厲声)・96丰音である。(3)「古十七部諧声表」134螻声について、「积音例」第15部には螻声ではなく、93蠹声がある。「螻」と「蠹」は『説文』では別の字である。『説文解字音均表』では第14部に萬音(0979A)があり、そこに「螻」字が所属し、第15部に蠹音(1074A)がある。(4)「古十七部諧声表」242軋声は「积音例」第15部にないが、軋声に問題があることについては許世瑛1942(51頁)の注26を参照されたい。

〈b〉の例として以下の諧声符がある。(1)「积音例」では16示声の他に11柰声を立てており、「古十七部諧声表」第15部に22示声はあるが、柰声はない。(2)「积音例」の92ノ声のもとにノ声・父声・艾声があり、「古十七部諧声表」第15部にはノ声・ノ声・艾声はないが、132父声はある。ノ声は「古十七部諧声表」では第2部の7番目、ノ声は第16部の8番目にある。『説文解字音均表』第15部では、ノ音(1072A)と父音(1073A)は別々の初声となっており、艾音(1037B)は父音の二声で、ノ音は第2部(0099A)にも両見している。ノ音(1197A)は『説文解字音均表』では第16部にあり、初声となっている。(3)167彘声から208闕声までの諧声符について、「古十七部諧声表」第15部に対応する諧声符はない。『説文解字音均表』第15部まで見ると、彘音(1037C)は彘音(1037A)の三声となっている。彘声であれば、「古十七部諧声表」・「积音例」とも第15部に彘声がある(前者は90番目で後者は59番目)。闕声については問題があり、段玉裁は「闕」を第15部とするが(段注十二上12b),『説文解字音均表』では「闕」は第5部にあり、於音(0359B, 烏音<0359A>の二声)の所属字となっている。江沅は「积音例」では段氏の説に従って闕声を第15部に置いたが、『説文解字音均表』では諧声符に従って「闕」字を第5部に置いたのである。

以上の〈a〉〈b〉以外に注意すべき諧声符は「古十七部諧声表」の96奉声である(一つ後の97擗声については前述)。「积音例」では64棄声の二声が奉声である。先に本稿で第13部について論じた時、『説文解字音均表』で弁音(初声)が第13部(0802A)と第15部(1097A)に両見することを指摘した。弁音とともに、奉音は『説文解字音均表』において第13部(0802C, 弁音<0802A>)の三声と第15部(1097B, 弁音<1097A>)の二声に両見するので、これは注意すべきである。なお、『説文解字音均表』第15部において、棄音(1042A)

と奉音(1097B)とは別々の初声となっている。

#### 第16部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」20鳩声に対応する諧声符は「积音例」第16部がない。一つ前の諧声符19規声の「規」と「鳩」の右側はともに「夫」ではあるが、「鳩」は『説文』にない。「鳩」に字形に似た「鳩」は第15部である。張道俊2019(233-234頁)に“鳩”不是声首,『集韻』“雉鳩鳩”同字,鳩為十六部声首。“鳩”は声首ではなく,『集韻』では“雉・鳩・鳩”は同字であり,鳩は第16部の声首である。)とあり,これが妥当な解釈と思われる。『説文解字音均表』まで見ると,第16部に鳩音(1192A)があるが,「鳩」字は第15部肉音(1133A)の所属字として両見する。(2)「古十七部諧声表」25彖声は「积音例」第16部がない。『説文解字音均表』第17部には彖音(1207B,初声は彖音<1207A>)がある。彖声であれば「古十七部諧声表」・「积音例」とも第16部にある(諧声符の番号はそれぞれ24,16)。(3)「古十七部諧声表」49鷓声・62鬪声に対応する諧声符は「积音例」第16部がない。『説文解字音均表』第16部を見ると,兒音(1203A)のもとに所属字として「鬪」・「鷓」(「鷓」の重文)があり,諧声符としては挙がっていない。兒声であれば,「古十七部諧声表」・「积音例」とも第16部にある(諧声符の番号はそれぞれ18,12)。

〈b〉の例として,「积音例」47竹声から63紉声までの諧声符で,「古十七部諧声表」第16部に対応するものはない。

#### 第17部

〈a〉の例として以下の諧声符がある。(1)「古十七部諧声表」4丹声は「积音例」第17部がない。『説文解字音均表』第16部に丹音(1251A)がある。「积音例」第16部では2丹声が初声で過声が二声であるが,『説文解字音均表』第16部では丹音を初声とし,丹音(1251B)・過音(1251C)をそれぞれ二声・三声とする。(2)「古十七部諧声表」33罹声の「罹」字は『説文』新附字である。「积音例」第17部に罹声はない。(3)「古十七部諧声表」57萑声に対応する諧声符は,「积音例」第17部にないが,第14部に94萑声がある。『説文解字音均表』第17部には萑音(1288A)があるが,第14部にも萑音(0947A)が両見している。

〈b〉の例として,「积音例」35虧声から37蓀声までの諧声符で,「古十七部諧声表」第17部に対応するものはない。

## 5. おわりに

以上,段玉裁「古十七部諧声表」と江沅「积音例」について比較研究を行った。「古十七部諧声表」の諧声符の配列を「积音例」はほぼ継承しているが,完全に一致はしない。江沅

「積音例」の各部末に、段玉裁「古十七部諧声表」にない諧声符が大部分まとまっている部分（本稿で言う「増補部分」）があり、17部全部でそのような諧声符がある。但し、「積音例」は諧声符を単純に増やしただけではない。本稿で明らかになったように、「古十七部諧声表」にあって「積音例」にない諧声符がある。また、「積音例」にあって「古十七部諧声表」にない諧声符もあり、本稿では初声を主として見てきた。江沅が「積音例」で試みたのは初声を明らかにすることで、初声ごとに改行している。「古十七部諧声表」で初声と発展する諧声符が離れて存在するときは、「積音例」ではまとめている場合もある。特筆すべきことは、「積音例」の段階で、複数の部に両見する諧声符が出てきたことが白田1996に引き続き、再確認できた。これは段玉裁「古諧声説」の原則、つまり一つの諧声符は必ずある一つの部に属するという原則とは合わないことを如実に示す。また、筆者は「積音例」と『説文解字音均表』を比較したことがあるが、今回調べた例も参考にして、あらためて検討も必要かと思われた。

## 注

- 1) 「古十七部諧声表」第1部で里声は4番目で、次の5番に狸声が来る。25番目に才声があり、次の26番目に戔声、27番目に在声と並ぶ。出声は20番目で、次の21番に事声が来る。
- 2) 「古十七部諧声表」第1部で寺声、時声はそれぞれ65、66番目であるが、出声は20番目である。
- 3) 白田1987において、『詩経』の押韻字の抽出方法が厳密すぎたかもしれない。
- 4) 『説文解字音均表』第6部において丞音(0465A)のもとに蒸音(0465C)があり、蒸音に「蓋」字が所属し、蓋音はない。
- 5) 『説文解字音均表』第13部において「藁」字は囙音(0836A)の所属字である。
- 6) 白田1996(149頁)、注4で、すでに以下のように指摘されている。「諧声符の配列について今回は言及しないが、『説文解字音均表』(皇清経解統編本)と『説文積例』の諧声符の配列はほぼ一致する。」
- 7) 倉石1939(170頁)の「古十七部諧声表」第5部の諧声符について述べている個所で、「鼓」を第4部に入れるべきことが指摘されている。
- 8) 白田1996(151-154頁)において「積音例」で両見する諧声符について論じているが、全部について調べていないことは「6. おわりに」でも述べた。唇声については本稿で補足したい。
- 9) 「積音例」第6部に22庚声があり、第14部に98庚声があり、備忘としておきたい。
- 10) 「積音例」第7部6丰声の「丰」は誤刻で「丰」が正しい。
- 11) 張道俊2019(116頁)には「“嵩声”不是声首，段氏認為“嵩”為“崇”之異体，“崇”在第九部。」（“嵩声”は声首ではなく、段氏は“嵩”を“崇”の異体字とみなしており、“崇”は第9部にある。）とあり、新附字という言い方はしていない。
- 12) 段玉裁『詩経小学』（卷二十三、「文王，七章，章八句」）に次のようにある。「臺臺 或因『説文』無「臺」字，欲尽改『詩』『易』『礼記』『爾雅』『臺臺』為「媿媿」者誤。」（「臺臺 『説文』無「臺」字，欲尽改『詩』『易』『礼記』『爾雅』『臺臺』為「媿媿」者誤。」）

文』に「臺」字がないので、『詩』『易』『礼記』『爾雅』に見える「臺臺」を尽く「娓娓」に改める人もいるが、誤りである。）

## 参考文献

〈日本語文献〉著者五十音順

- 白田真佐子1987.「段玉裁「古十七部諧声表」第十五部の諧声符一配列の原則を中心として一」, 『お茶の水女子大学中国文学会報』, 第6号, 186-208頁。
- 1996.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声について—『説文解字音均表』との比較を中心にして一」, 『お茶の水女子大学中国文学会報』, 第15号, 148-164頁。
- 1997.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声の配列—『説文解字音均表』への発展」, 『お茶の水女子大学人文科学紀要』, 第50巻, 121-137頁。
- 2016.「江沅『説文解字音均表』の成書と刊行」, 『文学論叢』(愛知大学人文社会学研究所), 第153輯, 23-35頁。
- 2019.「江沅『説文解字音均表』の統経解本と清稿本における諧声符の配列—蘇州図書館蔵本を新たな資料として—」, 愛知大学語学教育研究室『言語と文化』, 第41号, 51-68頁。
- 倉石武四郎1939.『段懋堂の音学』, 京都帝国大学博士論文。
- 説文会(編)1994.『江沅説文解字音均表攷正』(お茶の水女子大学中国文学研究室内・刊行時)。
- 頼惟勤・説文会1983.『説文入門』, 大修館書店。

〈中国語文献〉著者中国語発音順

- 董国華2014.『漢字諧声与古音研究史論』, 福建師範大学博士論文。
- 杜恒聯2019.『段玉裁古音学諧声原理研究』, 中国社会科学出版社。
- 黄智明1996.「江沅『説文解字音均表』与段玉裁「古十七部諧声表」之比較研究」, 第五屆國際暨第十四屆全國聲韻學研討會(台灣:新竹師範學院)發表論文。
- 李新魁・麦耘1993.『韻学古籍述要』, 陝西人民出版社。
- 林慶勳1979.『段玉裁之生平及其學術成就』, 台灣:中国文化学院中国文化研究所博士論文。
- 曲烜・呂金剛2018.「江沅『説文釈例・釈字例』探賾」, 『學術交流』, 第8期(総293期), 132-139頁。
- 陶生魁2011.「浅議江沅『説文釈例・釈字例』」, 『殷都學刊』, 第1期, 132-136頁。
- 許世瑛1942.「段玉裁古十七部諧声表補正」, 『国立北京大学論文集(三十一年度)』, 1-60頁。
- 張道俊2019.『説文解字注』古韻部, 中国社会科学出版社。
- 趙一粟2022.「江沅『説文釈例』評議」, 『鄭州輕工業大學學報』(社会科学版), 102-108頁。
- 趙錚2004.「也談江沅『説文釈例』的性質」, 『湖北大學學報』(哲学社会科学版一), 第31卷第4期, 429-431頁。

〈引用書目〉著者中国語発音順

- 段玉裁.『説文解字注』三十卷『六書音均表』五卷。経韻樓本(句読套印・四部善本新刊本, 台湾・漢京文化事業有限公司, 1980年影印)。
- 『詩經小学』三十卷, 『段玉裁遺書』所収本, 台湾:大化書局(1977年影印)。

段玉裁「古十七部諧声表」と江沅『説文积例・积音例』

- 江沅. 『説文积例』二卷。『小学類編』所収本（咸豊二年〈1852〉序刊, 『説文积例』は咸豊元年〈1851〉刊。台湾・華文書局, 1970年影印）。『小学類編』所収本（東京大学東洋文化研究所蔵倉石文庫）
- . 『説文解字音均表』十七卷。台湾・国家図書館蔵稿本。清代稿本百種彙刊本（台湾：文海出版社, 1974年影印）。『皇清經解統編』本（台湾：芸文印書館, 1965年影印）。『皇清經解統編』本（東京大学東洋文化研究所蔵倉石文庫）。